



新編集委員長に就任して

澤田 廉士*

こんにちは。このたび編集委員長を務めることになりました。就任にあたって、一言述べたいと思います。日本の技術は簡単な言い方をすれば、かゆいところに手が届く技術、高信頼性で軽薄短小の量産技術を得意とするといえます。本学会の存在意義は大きいです。

私自身、1980年代後半から研究開発に長く携わっているMEMS (Micro Electro Mechanical Systems), 特に光MEMSについて述べますと、ここ5, 6年、よりパッケージが重要だと感じ、現在開発している光MEMSの製品化においてもパッケージまで考慮した構造設計を行っています。アナログ動作の大規模スイッチやスキャナなどに使用されるMEMSミラーの不安定の原因が一部明らかになるとともに、パッケージングなども改善され製品化が始まりつつあります。MEMSのように小型になればなるほどパッケージの存在が大きくなりサイズのみならず、パッケージが性能そのものを左右することになります。

エレクトロニクス実装学会も決して大きな学会ではありませんが、会員が若干ずつではありますが増加傾向にあり、今日の日本の学会では珍しい学会であります。講演会やセミナーなどの聴講者、参加者数は他学会と比べて目を見張るものがあります。とはいえ論文投稿についてはそう目ばしい様相を呈しているとはいえません。学術論文が少ない、英文の投稿が珍しい、など改善の余地が多くあります。講演者数は多いものの、論文にしにくい状況にあると思われます。

日本の技術は高水準であるのは間違いありませんが、標準化などのグローバル化、コミュニケーションの欠如などにおいて、その実力のわりには遅れをとっているのも事実です。そこでエレクトロニクス実装学会としてもグローバル化に対応していこうと考えます。来年の英文小特集発行をスタートとして、英文論文誌の単独発行など、学会全体としてグローバル化計画が進行中です。

また、パッケージングが得意なところが必ずしもデバイスの製造が得意とは限りません。パッケージング技術とデバイスのファブリケーション技術が得意な企業（事業部）の連携が不可欠です。MEMSに従事してきた私がエレクトロニクス実装学会の編集に携わることを好機としてデバイスとパッケージの交流促進、MEMSやバイオデバイスなどの新分野におけるパッケージの紹介も行いたいと考えます。

さらには、誌面を通じて、エレクトロニクス実装学会で活躍するメンバーのみならず、広く各学界のオピニオンリーダーやトップの意見についても紹介できれば幸いだと考えています。ご愛読よろしく申し上げます。